

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: 高度デザイン研究者養成プログラム（クロスファーターライゼーションを促す教育）
機関名	: 千葉大学
主たる研究科・専攻等	: 自然科学研究科デザイン専攻〔博士前期〕, 人間環境デザイン科学専攻〔博士後期〕
取組実施担当者名	: 勝浦哲夫
キーワード	: 感性デザイン, 創造工学, 生活造形

1. 研究科・専攻の概要・目的

本事業は自然科学研究科の人間環境デザイン科学専攻を構成する工業デザイン系（デザイン専攻〔博士前期課程〕教員数：23名、学生数：117名、人間環境デザイン科学専攻〔博士後期課程〕教員数：63名、学生数：104名）が、都市計画・建築・園芸の他の構成メンバーとの連携のもとに、これまでに築いてきた産業界との太いパイプと海外の有力デザイン校との広いネットワークを駆使して、若手研究者に多様な研鑽の場を用意し、その結果を統合して研究に新たな視点をもたらす教育プログラムを開発・実施し、複雑・多様化した社会のニーズに応える若手デザイン研究者を育成しようとするものである。デザインに限らず、先端研究を行っている場では、如何に他分野の知識や考え方を上手に吸収・攪拌して高い創造性につなげるかが課題であり、工業デザインの領域ではそれが特に重要である。本事業ではこれを「クロスファーターライゼーション（異花受粉）を促す教育」として位置付け、同系がこれまで個別に提供してきた様々な研鑽場とそこでの成果を体系だった教育プログラムに構築し、大学院教育の実質化を企図したものである。工業デザイン系のこのような試みは人間環境デザイン科学専攻全体にとって重要であるばかりでなく、そのプログラムや成果は他の専攻に対しても波及効果が大きく、本学におけるモデルケースになりうると考えている。

2. 教育プログラムの概要と特色

今日デザインに求められる要求は、より高度化し、複雑化、多様化している。したがって、これに応え、中核となり得るデザイン研究者像も一様ではなく、社会のニーズに対応した多様で、高度なデザイン研究者の育成が必要である。そこで、本取組では、博士前期課程および博士後期課程において、都市計画、建築、園芸の3つのデザイン系との連携のもとに、養成する多様なデザイン研究者像に適したコース（教育）プログラムを開発・実

践する。具体的には基礎研究、作品研究、応用研究、ダブルドメインの各コースを設定し、それぞれに最も適した修了および修了までの要件を設け、多様なデザイン研究者を養成する。また、博士前期および後期課程のそれぞれ1年終了時に、研鑽結果と学位授与の連結を指導・評価し、修士候補生、博士候補生と認められた学生が次のプログラムに進むこととする。

修了および修了までの要件としては以下の5項目を実施し、大学院教育の実質化を図る。

- ①修了要件として作品を主とした論文の審査を加える
- ②異なるデザイン領域修得プログラム：他デザイン領域の演習授業の受講
- ③産学連携プログラムの遂行
- ④海外大学連携（アライアンス）プログラム：海外の大学での研修あるいは単位取得
- ⑤インターンシッププログラムの遂行

こうした多様な研鑽の場を通して、学生あるいは若手研究者は、これまでの狭い領域に留まらず、クロスファーターライズされ、研究における新たな視点の獲得が促される。また、若手研究者の流動性がさらに高まり、大学、産業界などの多様な場で次代をリードする研究者として活躍できるようになる。

次に履修プロセスに従い、プログラムの具体的な概要について説明する。

- 1) 博士前・後期ともに、基礎研究、作品研究、応用研究、ダブルドメインの各コースに分ける。なお、ダブルドメインコースの学生は前3コースのいずれかに所属し、そのコース以外もしくは工業デザイン以外の領域のカリキュラムを修得する。
- 2) 各コースの学生は、1年次に、それぞれのコースのベーシックプログラムを受講する。
- 3) 上記の2)に加えて、①異なるデザイン領域修得プログラム、②産学連携プログラム、③海外大学連携（アライアンス）プログラム、④インターンシッププログ

ラムの中から各コース必修のプログラムと選択プログラム一つを選び受講する。海外大学連携（アライアンス）プログラムを選択した学生のうち、成績優秀者には渡航費用を支援する。

4) 1年の終了時には、研鑽結果と学位授与の連結を指導・評価し、修士候補生あるいは博士候補生として認められた学生のみ次のプログラムに進む。審査は、企業の指導員や海外の大学教員を含む各プログラムの指導員の助言に基づいて、審査委員会にて行う。

5) 2年次（博士後期課程では2年次および3年次）では上記4プログラムのうち一つを選択し受講するとともに、修士ないしは博士の、論文の執筆あるいは作品を主とした論文の制作と執筆に従事する。

6) 修了の要件として従来からの論文に加え作品を主とした論文を含めるが、審査にあたっては、積極的に学外の専門家を交える。

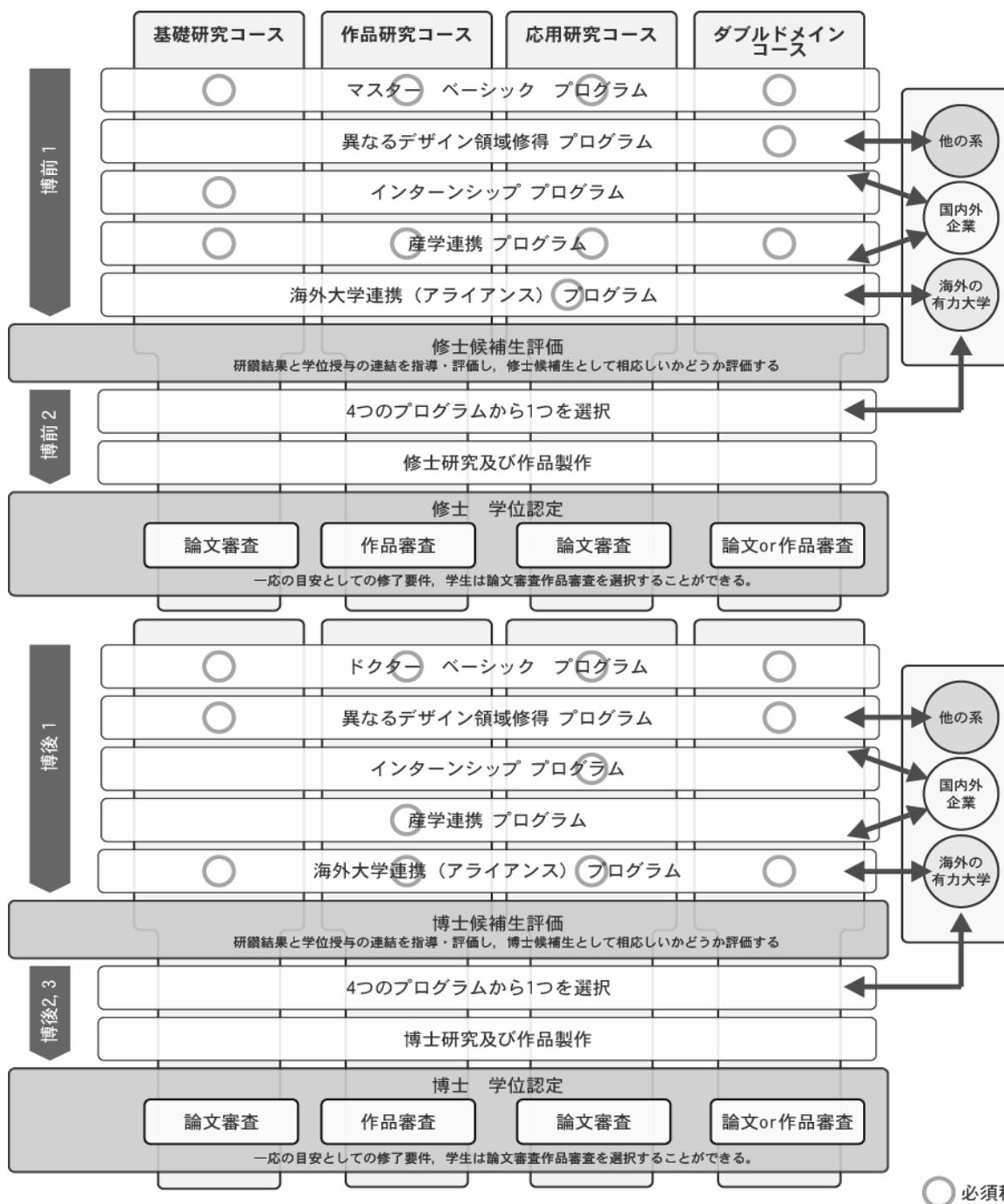


図1 履修プロセス概念図

3. 教育プログラムの実施状況と成果

(1) 教育プログラムの実施状況と成果

本プログラムでは、以下の5つの目標を掲げている。

- ①修了要件として作品審査を加える
- ②異なるデザイン領域修得プログラム（他領域の修得による幅広いデザイン能力と創造性の修得）
- ③産学連携プロジェクトの遂行（産学連携プロジェクトの遂行による創造性の修得）
- ④アライアンスプログラム
- ⑤インターンシッププログラムの遂行

この5つの目標について、3つの実行ユニットを構築し、各ユニットにユニットリーダーを設け、プログラムを推進した。ユニットの構成は以下のとおりである。

1stユニット プログラム全体の管理運営（プログラムコーディネーター（青木弘行）が兼務する）および全体授業のコーディネートを担当（5つの目標①②）

2ndユニット 産学連携プログラム・インターンシッププログラム担当（渡辺誠）主に企業対応のプログラム開発担当（同③⑤）

3rdユニット 海外大学連携（アライアンス）プログラム担当（杉山和雄）主に海外の大学との連携を担当（④）

以下に、5つのプログラムの成果について述べる。

①修了要件として作品審査を加える

本プログラムで実行する大きな変革である、デザイン系における作品による修了を検討した。その結果、博士前期課程については規定の改正により、作品により修了が可能になった。ただし、単に作品を制作するのではなく、様々な実験や調査データをもとに分析し、その結果を基にした作品を制作することや、制作した作品について評価を行うことなどを修了の要件とすることなどについて現在最終的な修了の要件の設定を行っている。平成19年度には、作品による学位取得予定者はないが、今後積極的に作品による学位取得を推進する。

一方、博士後期課程においては、作品の製作だけで修了するのではなく、学位申請論文とともに審査を行うことについて検討した。その結果、現在が学位申請時点で求められる審査付き論文については、審査付き作品でも可能に刷ることについて内規について整備を行っている。論文と同等であると与えることが出来る作品の審査機関についての整備を進めている。

以上のように、修了要件として作品審査を加えることについては、規定および内規の整備をおこない実行することが可能となった。

また、このような整備の過程において国内外の工学に

位置するデザイン系大学および、芸術系のデザイン系大学を招聘し、「デザインにおける魅力ある大学院教育」シンポジウムを平成17年度に開催した。このシンポジウムは3月の20,21日の2日間連続で行い、のべ150名以上の参加者のもと、一日目は国内の5大学の招聘者より作品審査の可能性についての討議が、二日目は海外の招聘者より、世界的な修士・博士課程のカリキュラムの状況と今後の討議がなされた。なおこのシンポジウムの内容については、報告書「魅力あるデザイン系大学院教育シンポジウム」として記録しまとめている。



図2 デザインにおける魅力ある大学院教育シンポジウムパンフレット

②異なるデザイン領域修得プログラム（他領域の修得による幅広いデザイン能力と創造性の修得）

本プログラムは、平成17年度にカリキュラム改革を行い平成18年度より実行した。本プログラムは、専攻以外のデザインに関連する授業を修得するものである。授業前に、指導教員が事前指導を行い、参加者の研究領域とどのように関連しているかを教示し、授業終了後にはその授業で得た知見を自己の研究に応用することを事後指導として確認している。平成18年度には博士前期課程39名、博士後期課程4名がこの異なるデザイン領域修得プログラムを修得している。受講科目は多岐にわたっているが、以下にその一覧表をまとめる。このように、自然科学系のみならず人文・社会系でも修得している。

なおこの成果を受けて、平成19年度入学の、博士前期課程・博士後期課程では、この異なるデザイン領域修得プログラムを必修科目としている。

表1 異なるデザイン領域修得プログラム受講科目

領域	授業名称
建築学	公共空間論
	公共建築設計論
	住宅史特論
	建築環境デザイン論
	都市地域計画特論
都市環境システム学	都市風景計画論
	場所のデザイン論
	都市空間プロデュース論
像科学	視覚工学1
知能情報工学	音声情報処理
人文社会科学	視知覚論
先端経営科学	マーケティング論
	教育臨床行動学特論
	絵画表現研究BI

③産学連携プロジェクトの遂行（産学連携プロジェクトの遂行による創造性の修得）

平成17年度に計画し、平成18年度に以下の2つのプロジェクトを実行した（詳細については報告書「産学連携デザインプロジェクトワーク」参照）。

1 小型家電開発プロジェクト

本プロジェクトは、山田電器工業と機械システム専攻による産学連携プロジェクトである。本年度は、家庭で使用する新しい小型の電気製品を開発するプロジェクトを行った。山田電器工業は、自社ブランドを持たない小型家電の製造メーカーであり、この山田電器工業の事業ドメインの中で自由に製品を開発するものであった。デザイン科学の専攻の学生は主に、製品開発とデザインを機械システム専攻の学生は、機器の内部機構の検討と全体の設計を行い4つの小型家電を開発し提案した。参加学生は、デザイン専攻の学生が7名であった。図3は開発したものの最終プレゼンテーションの一例である。この商品は、提案した商品の1つである「石鹸泡だて器」である。図4のように何度も実験を繰り返すことで、最終提案にいたっている。

産学連携プロジェクトの一番の目標は実践能力の育成である。本プロジェクトは十分にその成果を得ることができたとともに、機械システム専攻の学生や山田電器工業の専門家との共同作業により、デザインだけの机上の空論ではない「作れる・作れない」のせめぎ合いや、製

品化を実現させるための問題解決法、特に企業におけるコスト意識の習得などの知識を獲得することができた。

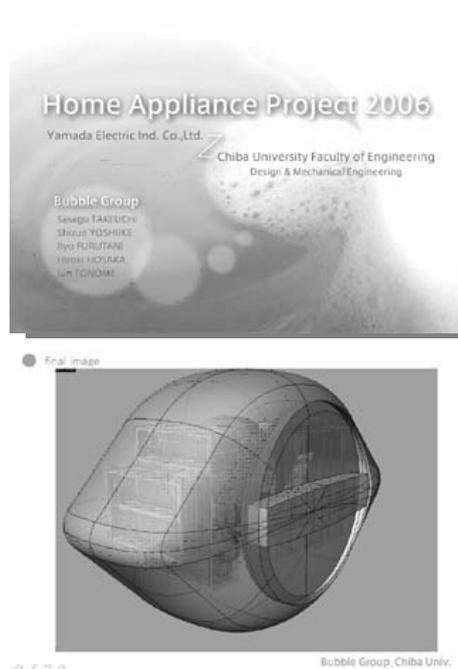


図3 小型家電開発プロジェクト「石鹸泡だて器」



図4 「石鹸泡だて器」設計のための実験風景

2 ニューファミリー向け家具開発プロジェクト

本プロジェクトは、アイリスオーヤマ・大連アイリスオーヤマと清華大学（中国北京）大連理工大学（中国大連）に千葉大学を加えた四者による産学連携プロジェクトである。アイリスオーヤマは、大型ホームセンターを中心として商品を開発・製造・販売している企業である。このアイリスオーヤマの商品アイテムとなりうる家具の開発をテーマとして産学連携プロジェクトを行った。参加学生は10名である。

本プロジェクトは、専門家からの指導を受けるとともに、2つの中国の大学とも提案内容について討議を行うことができ国際化の面においての成果も得ることができ

た。図5は成果発表の風景である。このようなプレゼンテーションを日本（仙台）で1回、大連で2回行うとともに、アイリスオーヤマの研究開発拠点である仙台・角田において5日間のワークショップも開催した。成果は、好評を得られ、来年度以降も継続となった。

プロジェクトを通して、参加学生はかく開発がいかにかに難しいかを体験することができたとともに、企業におけるコスト意識の習得、より実践的なデザインコンセプトの立案方法の習得、家具の製造過程などを学習することができ、実践的なデザイン研究が行えた。また、中国の大学との共同作業であることより、文化の違いによる家具への考え方の違いを体験でき、国際社会に向けた商品開発の難しさも体験できた。



図5 日本でのプレゼンテーション

④アライアンスプログラム

アライアンスプログラムは、その成果を大きく3つに分類することができる。第一は、平成17年度に行った学生を海外に派遣し、海外大学のカリキュラムを調査した「デザイン・ディスカバリー」、平成18年度に行ったワークショップを主体とした4つの「海外アライアンスプログラム」、教員が今後のアライアンス提携校発掘を目的として海外の大学に赴き実際に教育や研究を経験する「若手研修者海外派遣」である。以下のこの3つについて述べる

1 デザイン・ディスカバリー

デザイン・ディスカバリーは、海外の提携大学および新規のデザイン系・デザイン関連の大学に赴き、学生の視点からカリキュラムを調査するとともに、その調査結果をもとに千葉大学の将来のデザイン系のカリキュラム開発のための提言をすることを目的としている。本デザイン・ディスカバリーでは、学生から調査の提案を受け、その内容を審査して、最終的に10チーム23名で、米国、

オーストラリア、中国、台湾、英国、ノルウェー、フィンランド、ドイツの8カ国の調査を行った。

写真は、英国に渡航した学生がRCA（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート）のIDE（インダストリアル・デザイン・エンジニアリング）コースの調査を行っているものである。このコースは、RCAとインペリアル・カレッジのジョイント・プログラムであり、デザインとエンジニアリングの2つのドメインをあわせ、エンジニアリングよりのデザインの教育・研究を供給するものである。学生の提案からは、カリキュラム全体が考えて作るプロセスであることからモデルショップなどの施設が充実していることまでさまざまな提言がなされた。また、教員のシステムとして、プロフェッショナルな非常勤講師の多用、授業への最先端技術者の招聘などの提言や、教員の流動性によるメリットなども提案された（詳細については報告書「デザイン・ディスカバリー」参照）。



図6 デザイン・ディスカバリー RCA・IDEでの調査

2 海外アライアンスプログラム

平成18年度に海外アライアンスプログラムとして、海外3箇所、千葉大学で1回、ワークショップ主体の海外アライアンスプログラムを実施した。アライアンスプログラムは、成功大学（台湾）、全北大学（韓国）のように、先方の大学が主催したものに対して学生と教員が参加したものと、南洋理工大学（シンガポール）や千葉大学で開催した成功大学とのプログラムのように、千葉大学が主催あるいは共催したものの2つに分けることができる。

成功大学でのアライアンスプログラムは、課題「Enjoy!」と「Green Attitude」で5月21日-25日の5日間のグループワークを主体としたものである（図7は課題の一部）。参加大学は、以下の世界7大学（表2参照）と、台湾国内の20校の学生が参加していた。千葉大学からは学生2名と教員2名が参加した。参加人数は、学生

42名教員20名であった。

この成功大学でのアライアンスプログラムは、課題に対してデザイン提案を行うものである。提案に対して、外部の企業と各大学の教員が審査委員となり、順位がつけられ賞状を授与するというコンペティションスタイルのワークショップであった。学生は5日間という短期間ではあるが、英語でのコミュニケーションと海外というなれない中で、有意義な時間をすごした。また参加している大学の教員からもレクチャーがあり、これらも学生にとっては刺激的なものであった。

一方、千葉大学が主催した海外アライアンスプログラムとしては、南洋理工大学で行ったものが上げられる。このプログラムでは、SII (セイコーインスツル) および SIS(セイコーインスツルシンガポール)の協力を受け、「Dream of Wearable tools 2020」という課題を設定してデザインを行うワークショップであった。本プログラムでは、開催の1ヶ月前に課題を提示し、開催の6月17日-22日の5日間の期間の初日にプレゼンテーションを行い、グループを作成してワークショップを行い、最終日には評価会を行った。SIIからは期間中上級デザイナーを派遣していただき、ワークショップ遂行に際して惜しみない協力をいただいた。また期間中にSISに工場見学を行うとともに、SIIのエンジニアから課題に即したレクチャーを受けた(図8はスケジュール)(内容については報告書「海外アライアンスプログラム」参照)。

表2 海外からの参加大学一覧

Carnegie Mellon University ,USA
Chiba University ,Japan
Delft University of Technology ,Netherlands
Illinois Institute of Technology ,USA
Korean Advanced Institute of Science and Technology ,Korea
Nanyang Technological University ,Singapore
Tsukuba University ,Japan

各グループは南洋理工大学の学生2名に対して千葉大学1名で構成し、すべて英語でのコミュニケーションで推進した。南洋理工大学はその30パーセント以上が外国人でそれゆえに今回の参加者も4カ国にまたがっており、企業のデザイナーの実践的指導、英語でのディスカッションと製品開発と、さまざまな成果を参加者にもたらした。図9は、事前課題のプレゼンテーションであり、各参加学生はこのようなプレゼンテーションを初日に行

いたワークショップを行った。



図7 成功大学におけるアライアンスプログラムの課題

	AM	PM
05/05	Preparatory Work Announcement "Dream of Wearable Tools in 2020" Each student prepares panel board (A1 size) regarding the theme with Target, User Life Style, Technology and Story (see details another file).	
07/17 MON	Opening Briefing from Seiko Instruments Inc. about Workshop Theme Initial Presentation Preparatory Works from Each Students Grouping (Divide into 6 Groups)	Group Work 1 Concept Making Create the Concept Scenario
18 TUE	Lecture 1 "Dream of Wearable Tools" Senior Designer from Seiko Instruments Inc.	Group Work 2 Product Planning Discuss New Technology
19 WED	Group Work 3 Service Planning Discuss Service & System	Visit SIS&AET Lecture 2 "MEMS and Wearable Tools" Representative of Seiko Instru Inc. Singapore Office
20 THU	Group Work 4 Design Freeze Preparing the Presentation CG Model, Presentation Files and ETC.	Group Work 5 Preparing the Presentation
21 FRI	Final Presentation from Each Group Closing Reviewing	(Visit EDB Staff Only)

図8 南洋理工大学とのワークショップスケジュール

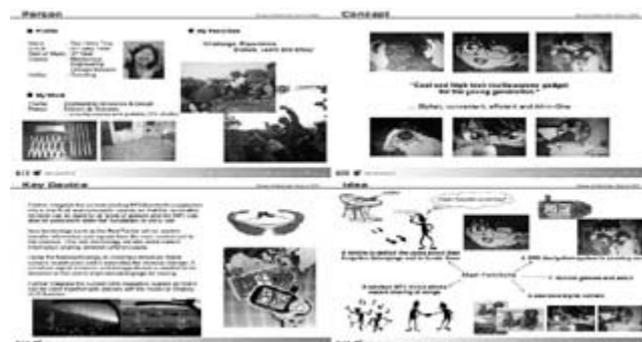


図9 事前課題のプレゼンテーション



図10 南洋理工大学でのワークショップの風景

3 若手研修者海外派遣

若手研究者海外派遣は、主に助手の教員を対象として、

海外の大学において実際に授業に参加したり、共同で研究を行うことで、今までとは異なる新たなかつ先端的な研究を行っている機関を発掘することを目的として行った。参加教員は7名であり、2ヶ月から10ヶ月の期間で以下の大学で主にカリキュラム開発を行った。

■デザインビジネスコース

ツォルフラインスクールオブデザイン
(ドイツ・ツォルフライン)

■プロフェッショナルデザインマネジメントコース

プラットインスティテュート (米国・ニューヨーク)

■タンジブルデザイン

UIAH (フィンランド・ヘルシンキ)

■工学における造形教育カリキュラム

KAIST (韓国・テジョン)

■プロフェッショナルデザインエンジニア

清華大学 (中国・北京)

■エンジニアリングデザインカリキュラム

ダブリン工科大学 (ドイツ・ダブリン)

■タンジブルデザインカリキュラム

イリノイ工科大学 (米国・シカゴ)

カリキュラム開発とは、教員が実際に相手先の大学で授業に参加し、その内容を実際に体験することで、「今後千葉大学の学生がこの授業を受けることが望ましいか」を検討し海外アライアンスの候補校とすることについて見当するとともに、「千葉大学が高度デザイン研究者養成に必要なプログラム」であるかを見極め、そのカリキュラムを手本として新たなカリキュラムを開発することについて検討するものである。たとえば、デザインビジネスコースのツォルフラインスクールオブデザイン(ドイツ・ツォルフライン)を例に上げると、デザインにおけるビジネスクラスが存在する。これは現時点では千葉大学が提供することが難しいカリキュラムが多いが、ディベート中心のクラスは理論構築力に役立ち、アライアンス先としては十分に可能性がある(図11)。一方で、鉄鋼メーカーがスポンサーになったデザインマネジメントプロジェクトは千葉大学においても十分可能なものであり、多少の変更は必要なもののカリキュラム開発の対象となりうる(図12)。以上のようなカリキュラムの開発を7名に行ってもらいその成果は今後の大学院教育改革に反映する。(詳細については報告書「アライアンスプログラム開発-若手研究者海外派遣」参照)。



図11 ディベートを中心とした授業 (MBAクラス)



図12 鋼鉄会社がスポンサーのプロジェクト授業

⑤インターンシッププログラムの遂行

インターンシップは平成10年より単位化を行い平成18年度まで、継続的に行われてきている。平成17年度は、18名が15の企業で、平成18年度は、15名が13の企業でインターンシップを行った。インターンシップの期間もまちまちで最短で1週間最長で2ヶ月までさまざまである。また、対象企業も多岐にわたり、昨年度あたりから企業だけではなく、自治体なども行っており、学生が参加している。年々、各企業とも短縮化の傾向にある。そのため、平成18年度には、長期間のインターンシップなどの検討などを協力関係にある企業にお願いした。今後インターンシップを継続する上で、ある程度の期間、大学としては3週間以上の期間の開催を依頼している。(詳細については「インターンシップ報告書2006」参照)。

(2) 社会への情報提供

千葉大学では、プログラムの成果の情報公開を積極的に取り組んできている。

第一は本プログラムの成果を公開するホームページの開設である。URLは<http://www.dda.ti.chiba-u.ac.jp/initiative/gs/index.html> である。図13はホームページのトップページである。本プログラムの概要、プログラムの説明と活動履歴を掲載している。



図13 本プログラムのサイトのトップページ

ホームページ以外には、2つの情報公開を行った。一方は、先に述べた、平成17年度である平成18年3月の20,21日に開催した「デザインにおける魅力ある大学院教育」シンポジウムでは、国内外の大学関係・日本産業デザイン振興会・企業からのべ150名以上の参加があった。このシンポジウムの同じ会場で、デザイン・ディスカバリーの成果についてもポスターセッション形式で発表した。もう一方は、平成18年8月23-26日に開催したGDPグッドデザインプレゼンテーション（日本産業デザイン振興会主催）において、デザイン・ディスカバリーとこれまでの産学連携の成果を公表した（図14）。このGDPグッドデザインプレゼンテーションは、企業の参加もさることながら、デザインを志す高校生、現在デザイン系属している大学生・大学院生の参加が多く、プログラム内容を公開するには最適の場所であった。26日には20分程度のステージプレゼンテーションもあり、千葉大学のプログラムをアピールすることができた。（情報公開に用いた資料については「グッドデザイン・プレゼンテーション2006」参照）。



図14GDPグッドデザインプレゼンテーション

また、平成18年度末の(社)電子情報技術産業協会(JEITA)の「デザイン委員会」が大学を訪れる機会があり、40名の企業のデザイン部門長の方々を対象に、今までの取り組みについて説明するとともに、プログラムについての意見や評価をいただくことができた。おおむね千葉大学における大学院での高度デザイン研究者養成には

理解をいただき、今後の産業界の継続的な支援をお願いした。

4. 将来展望と課題

(1) 今後の課題と改善のための方策

本プログラムでは、5つの目標を掲げ遂行してきた。これに関してはほぼ達成することができた。一方で、教員が海外の教育機関に赴きさまざまなカリキュラムを体験した結果、千葉大学の長所と短所が明らかになった。長所は、プログラムでも実行できたとおり、産業界との密接な関係である。この部分は今後継続的に今以上の関係を築き上げることで、今後必要とされるデザイン研究者の人材像や、社会の要請たえうる大学になると考えられる。一方短所については、デザインの新たな領域に対する積極的なチャレンジが弱いという点である。デザインの教育・研究機関としては、規模的には世界1,2位を争う大きさであるにもかかわらず、新たなチャレンジが少ない。もちろん全くないわけではないが、もっと多くの新しいカリキュラムやコース、研究領域の提案と実行がのぞまれる。

(2) 平成19年度以降の実施計画

平成19年度以降には、以下の2つの試みを検討している。1つは本プログラムで整備しえなかったダブルドメインコースの設置と実行である。これは、先にも述べた新しいコースの試みである。ダブルドメインにはいろいろな2つの領域が考えられる。海外の多くは工学と経済学のような組み合わせが多いが日本ではそのようなプログラムはなかなか難しい。そこで現時点では、サービス産業と製造業の両方の知識を持ちえるデザイン人材を育成することを考えている。デザインでありながら全く個となる領域を2つ学習することをダブルドメインと称してコース化を試みたい。2つのドメインの知識をひとつの知識として織り成すようなカリキュラムと教育研究にチャレンジしたい。

二番目は、産学連携の新しいあり方の模索である。昨今の産学連携は、各研究ユニットの専門性がゆえにあまりにも専門に特化したものが多い。そこで、デザインにおける産学連携として、より広い視野に立ち問題発見から解決をできるような研究に対する大きな視点の持ち方を身に着けることができるような産学連携を試みたいと考えている。さらには、この産学連携をインターンシップと連動させることで、ともすると就職活動の事前活動的になりつつあるインターンシップを、真のインターンシップとするカリキュラムを考えてゆきたい。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における事後評価結果

【総合評価】
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的は十分には達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>「高度デザイン研究者を養成する」という目的に沿って、「クロスファーターライゼーション（異花受粉）を促す教育」との位置付けの下、工業デザイン系と都市計画、建築、園芸のデザイン系との連携による教育プログラムが着実に実行されている。修了要件に作品審査を加える、産学連携プログラムや海外大学連携（アライアンス）プログラムの遂行などの面で我が国のデザイン系大学院教育の実質化に波及効果をもたらすと評価される。</p> <p>教育プログラムの取組については、ホームページ、シンポジウムやGDPグッドデザインプレゼンテーションにおいて広く公開し、先導的なモデル事業として貢献している。</p> <p>今後は、異なるデザイン領域修得プログラムの更なる推進と、アライアンスプログラムで得られた成果を基にダブルドメインコースを実行することにより、新たな領域の開発へと進展することが期待される。</p>
<p>（優れた点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ デザイン領域における産学連携、海外連携に成功して組織的展開を図っている点で、新しいデザイン分野のカリキュラム開発に貢献するものとして評価できる。 ・ 異なる領域修得を可能にしたことで、自然科学のみならず、人文・社会系科目まで修得科目が広がり、多様化した社会的ニーズに応えられるデザイン研究者の育成が期待できる。 <p>（改善を要する点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ プログラムは、基礎研究、作品研究、応用研究、ダブルドメインの4コースから成っているが、各コースの目指すところ、魅力、履修内容、学位取得法などについて学生への周知を徹底し、学生自ら選択できるようにきめ細かい指導を図ることが望まれる。